1
いわゆるヒューレー(素材)は、「下に横たわる何か(アリストテレス「自然学」i9,192a31)」であり、イデア(形相)の「ヒュポケーマ(受け皿)(テティマイオス「ティマイオス」49a)」であるから、このような本性の観念をもつにいたったすべての人たちが、そこにおいて、この古い共通の観念を主張しており、ここまでは同じ道を歩んでいる

2
それゆえまず後者について、果したてるのかどうか、またそれは何であるのか、どういうふうにあるのかを探求しなければならない

なお、彼らはそれは無性質で無体であるといって、物体であることをそれに認め、またそれに加えて、物体であることをそれに認めることも認める

しかもまた、彼らはそれを持ち込んで、あげくのはてに、彼らの神すら、ある様子をしたこの素材である、とあえて主張する。

そしてつま、ある人たち(ストア派)は、有るものは物体だけであり、これらの内にこそ実有がある之定めた上で、素材はただ一つであり、それは諸元素の下に置かであり、それこそ実有のであり、他のすべてのものは、いわばそれの様態であり、諸元素に属しても、ある様子をしたそれである、と主張する

しかし、この「下に横たわる」本性が何であるのか、またそれが、どのようにして、何を「受け取る」ことができるのか、これらの点を研究し始めると、ここからすでに彼らの意見は分かれた

他方、別の人たちは、それを非物体的なものだという。しかも、それを、彼らのうちのあるA父は、一つ一つ一先の人たちが言っているようなものが物体の下に潜んでいる、とこの人たちは自身も言うのが——さらに別の、もっと前の素材が、源知されも領域に、つまり、かの所の諸々の形相と非物体的な実有の下に潜んでいるのだ、という

もっと前の素材、つまりヒュレーに先立つヒュレーとは何か？

さて、素材というものは、何か無限定で無形のものでなければならないとすれば、そしてかの所の諸々のものは無限定であり、それは、諸々の諸々のものは最良のものであって、それらのなかには無限定なものも無形なものも何一つあり得ないとすれば、素材もまたかの所にはありえないであろう

また、(イデアの世界であって)それぞれのものが単一のものであるとすれば、素材と他のものとから複合物が作られることを要しないから、素材も必要ではないだろう

また、生成し、あるものから別のものへ作り変えられるものには素材が必要だが——そしてこれらのものから、感覚対象の素材といろものが考えられるにいたったのであるが——一他方、生成しないのには素材は必要ではない

また、もし(直知界に素材があるとしたら)それが永遠のものであれば、まさに(諸々の形相の下にあるのだから)複数の始原があることになり、(永遠に有る諸々の)第一位のものたちが(生ずることなしに有るのだからその下にある複数の始原の組合せで有るということは)偶然の巡り合わせで存在することになろう

(直知界に素材があるとしたら)それが永遠のものであれば、まさに(諸々の形相の下にあるのだから)複数の始原があることになり、(永遠に有る諸々の)第一位のものたちが(生ずることなしに有るのだからその下にある複数の始原の組合せで有るということは)偶然の巡り合わせで存在することになろう

素材は一つであると言っている

この世の素材が一つで、かつ凌駕されるのに、種々の分解しうるものが種々の形相から作られるのはなぜか？

また、形相が到来するのであれば、(諸々の第一位のものの下に始原があるから発生しているのであり)複合物は物体であるだろう、したがって、かの所にも物体があることになろう

また、直知される領域での「複合物」はちがった意味をもつのであって、物体の場合と同じ意味ではない

素材はもっぱらそれ自身で、かつ凌駕されるのに、種々の分解しうるものが種々の形相から作られるのはなぜか？

この世の素材が一つで、かつ凌駕されるのに、種々の分解しうるものが種々の形相から作られるのはなぜか？

だから、どの形相もそこにとどまってはいない、という。一つの形相が他の形相を押しやるのだから、だから素材はいつも同じものであることができない

だから、かの所でも、かの所の素材は、いかなる時にも決して無形ではない、というのは、この素材もそうではないからなのだが、たぶん両者がそれぞれ異なった仕方で(無形でないの)である

また、かの所の素材が永遠のものであるとしたら、もしかしたらそれは、それが何であるかをわれわれが把握したあとで、明らかとなるだろう

4
さて、われわれは今、諸々のイデア(形相)が存在すると前提したとして、——そのことは他の個所で証明されたのだから——議論を進めよう

そもそもイデアは「もの」ではないのではないか。また素質がもの(に宿る必要性はないのでは？

では、形相が多数であるならば、それらの内には何か共通なものとさらに基た、それぞれの形相がそれぞれとして他の形相から異なる特有のものとがあることは必然である

そして、まさにこの特有のもの、そして分離する差異こそが、固有のエイドス(形)である、しかし、形があるならば、形を与えられたものがあるる、差異はそこに宿るわけである

さらに、かの所に英知的な世界が存在するとして、そしてこの世界はかの世界に模されたものであり、そしてこの世界はかの世界に模されたものであり、そしてこの世界はかの世界に模されたものであり